



バケツに育てたヒルギ

るが、生徒達は大変感心してよく見てくれる。生物授業はやはり“実物”を見せることである。現在はバケツに植えているが、余り格好のよいものではないので近い内に適当な容器に植えかえる予定である。

このヒルギは池本忠平先生が昭和59年8月2日—6日の日本生物教育会第39回全国大会・沖縄大会の研修で西表島で採集されたものである。種名は小苗なので確実にはわからないが、葉・茎の様子から多分オヒルギであろう。

末筆ながら貴重な小苗を頂戴した池本忠平先生に厚く御礼申しあげる。

兵庫県東播磨地方の水生植物追記(2)

角野康郎

追記(1)(本誌No19, 1985)では、ため池で新たに見出された水草を報告したが、今回はため池以外の水域に生育する水草を5種追録する。

1. ササバモ

東播磨地方の河川は、直接瀬戸内海に流入するいくつ

かの中小河川をのぞけば、ほとんどが加古川水系に属する。その加古川水系に見られる水草の代表的なものが本種である。加古川本流の中流域に相当する西脇市から小野市にかけて、特に多産する。

2. デンジソウ

兵庫県下でもめったに見かけることなくなったデンジソウであるが、加古川(小野市市場町付近)に生育している。昨(1986)年までは水辺から川の中までかなりの群落をつくっていたが、今冬、その場所にブルドーザーが入り川底をならしてしまった(その後新しい工事が始まっているわけではないので何のためにここだけそんなことをしたのか今もってわからない)。そのためにデンジソウ群落は大半が失なわれてしまった。今では、ごくわずか残っているのみである。

3. ミクリ

今まで当地方のミクリ属植物としては、ヤマトミクリしか確認していなかったが、昨年、小野市粟生町付近の加古川の一角にミクリが群生しているのに気づいた。しかし、ここもまた、この冬に行なわれた築堤工事によって被害を受けた。絶滅かと思ったがわずかに残って生育している。

4. ミズハコベ

本種は河川、水路あるいは水田でよく見かけるが、ため池では見ていない。ミゾハコベも同様である。

5. オオフサモ

本種の野生化が日本で最初に確認されたのは当地方においてである。“大正の中頃、須磨遊園地(神戸市須磨区一筆者注)の溝の中に大型の「フサモ」が自生」と記録されている(山鳥吉五郎「阪神地方帰化植物漫談」、兵庫県中等教育博物学雑誌 第3号、昭和14年)。これを牧野富太郎が、当初「スマフサモ」と命名して発表したわけである。牧野博士は須磨寺でも見出したということだが、現在の同寺にはオオフサモは残っていない。“須磨遊園地の溝”もそれがどこをさすのか定かでないが、私は、須磨近辺でオオフサモを見かけたことがない。どうも消えてしまったようである。

一方、山鳥は先に引用した文献の中で、“大正9年、明石公園の外堀に繁茂せることを発見し、ハスを減退させるので除草を企てた”とするしている。こちらのオオフサモは現在まで残り、旺盛に繁茂している。但し外堀からは消え、公園内部の池に多い。これは自然の分布ではないが、オオフサモの帰化の歴史の上からは由緒ある

場所ということになるので、あわせて記録しておきたい。

○文献リスト<1986—(3)>

内山 寛・中田政司・小西達夫・田中隆荘. 中国遼寧省産古代ハスの核型. 筑波実験植物園研報 4: 21—24.

小田中敏男. 水生植物による流水の浄化に関する研究. 東京都立工科短大研究報告 14: 145—156.

村上雄秀. 横浜市内河川の沈水植物. 横浜の川と海の生物 第4報: 151—153

<1987—(1)>

石井 猛・上岡雅幸. ホテイアオイの水質浄化と有効利用への研究. 水処理技術 28: 145—160.

伊藤 至. 新潟県のカモガワモ. レポート日本の植物 No. 31: 110.

因野要一・亀岡俊則・崎元道男・阿部一博. 豚舎排水の浄化処理水を用いたバイオマス生産と栄養塩類の除去. 水処理技術 28: 83—89.

薄葉 満. 福島県の興味ある水生植物Ⅲ. フロラ福島 No. 5: 5—11.

内山 寛. 広島県のコタヌキモの新産地. 食虫植物研究会誌 38: 18—19.

大滝末男. 日本産オニバスの総説. 日本の生物 1(4): 48—55.

岡村大一郎. ホテイアオイの製紙への利用について. ホテイアオイ研Newsletter No. 10: 5—6.

沖田貞敏. ナンプソウとスギナモの採集報告. 秋田自然史研究 No. 21: 26.

角野康郎. セタカミズオオバコの新産地. 植研 62: 145—147.

蒲原幸生. ホテイアオイとの縁. ホテイアオイ研Newsletter No. 10: 6—7.

木下慶二. 稀少種水生植物の採集記録. 南紀生物 29: 14.

小宮定志. タヌキモ属の生態型とその分類学的意義について. 食虫植物研究会誌 38: 19—23.

———・柴田千晶・南雲 保・桜井謙一. 羽生市宝蔵寺沼ムジナモ自生水域における環境の変遷(1982—1986)及びムジナモ他水生植物の放流実験. 日本歯科大紀要(一般教育系) No. 16: 221—241.

佐瀬秀男. コウキクサが福島県にあった. フロラ福島 No. 5: 12.

汐見信行・鬼頭俊而・矢田敏晃. アカウキクサの飼料としての利用の可能性. 畜産の研究 41: 523—526.

高田 順. 秋田県の水生植物フローラ—最近の知見— 秋田自然史研究 No. 21: 27—29.

高田憲明. 水生植物の無菌培養. 遺伝 41(2): 16—19.

高橋道彦. ホテイアオイ雑記. ホテイアオイ研Newsletter No. 10: 3—6.

富久保男. 水生雑草ホテイアオイの生育並びに繁殖特性について. ホテイアオイ研Newsletter No. 10: 1—2.

外山雅寛. 苫小牧市弁天沼よりムラサキミミカキグサ及びシロバナミミカキグサの新分布記録. 食虫植物研究会誌 38: 3—7.

———. 北海道におけるナガレヒメタヌキモの新産地(I). 同上 38: 7—9.

———. 北海道湧払郡苫小牧市より *Utricularia* 数種の分布記録Ⅱ. 同上 38: 9—11.

———. 北海道に於けるコタヌキモの注目すべき生態. 同上 38: 11—17.

長井真隆・太田道人. いたち川の水生植物. 富山市科学文化センター研究報告 No. 10: 9—12.

宮崎 昭. アメリカと中国のホテイアオイの防除と利用. 畜産の研究 41: 303—306.

Ikusima, I. & J. G. Gentil. Studies of vegetative growth and productivity of *Eichhornia azurea* in the Rio Doce Valley lakes. Limnological Studies in Rio Doce Valley Lakes and Pantanal Wetland, Brazil, pp. 89—101, Water Research Institute, Nagoya University.

Ito, M. Phylogenetic systematics of the Nymphaeales. Bot. Mag. Tokyo 100: 17—35.

Kadono, Y. Aquatic plant communities of irrigation reservoirs in East Harima area, Hyogo Pref., southwestern Japan: typology based on the dominant species. J. Phytogeogr. & Tax. 35: 40—45.